

これまで本研究所に在職して活躍された研究員経験者のお二人から、
当時の研究室の様子や研究室への思いを寄稿していただきました。

（掲載は五十音順）

沼尾 波子 さん

（1997年4月から3年間に在職、現在は東洋大学国際学部教授）

都市問題・地方自治について100年以上の歴史を有する当研究所に身を置くことができたことは、私にとってかけがえのない経験となりました。研究所には、行政法、行政学、政治学、財政学、社会学、都市計画など、都市問題や地方自治を取り巻く多様な専門分野の研究員が在籍しており、分野横断的な議論を行うことができる環境は非常に魅力的でした。

また、館内には市政専門図書館が併設されており、貴重な資料に囲まれて研究に取り組むことができたこと、さらに、歴史ある研究所として研究員OBOGの研究者たちとの交流機会があったことも、以後の研究活動において大きな財産となりました。日比谷公園や霞が関に隣接するという恵まれた立地も、魅力の一つです。

当研究所は、文部科学省の科学研究費助成事業（科研費）の指定研究機関でもあり、個人研究に加えて自主的な共同調査を行う機会にも恵まれています。さらに、研究所が発行する月刊誌『都市問題』では、特集企画の立案に携わる機会もありました。

後藤新平と安田善次郎の思いとともに、100年以上前に始まったこの老舗シンクタンクが、どのような歴史を持ち、現在どのように活動しているのか——。そこへの参画を考えながら、ぜひ一度、見学にいらしてみたいと思います。

渡邊 克利 さん

(2013年4月から2年間在職、現在は武蔵野市資産活用課長)

私は武蔵野市役所より派遣され2年間お世話になりました。東京市政調査会から現在の名称に変更されて間もない頃で、まだ「調査会」と呼ぶ研究員もいました。果てることのない都市問題の現状を文字通り現場に立って調べ、時には自主独立の調査研究機関として論説や研究成果を発信してきた、〈歴史〉に対する想いを感じさせられたことを覚えています。

当時の自主共同調査は「東日本大震災からの復興と自治—自治体再建・再生のための総合的研究—」でした。復興計画が走り始めた時期に現地に何度も滞在し/暮らし、様々な方にお話を伺いながら調査を進め、東京では制度の担当官や学者にも会いに行き、市政専門図書館の書庫に潜り込み、そして自席に戻り諸々まとめ、煮詰まれば皇居の周りを走る。そうした時に限って『都市問題』の企画や書評が降ってきて、研究会議等で鋭いご指摘をいただく。途方に暮れながら、なぜか、山へ…。のめり込みました（皇居ランでも山でもなく調査研究の方です）。

どの場面でも、派遣の行政職員を含め個性豊かな研究員や上司がそばにいてくれました。行政職員としては固まり切っていなかった自分と同様、方向性を模索中の研究員達が同じ現場に立ち、向き合い、錚々たる学者から刺激を受け共に変化していたのだと思います。私にとって、行政としての立場や限られた経験による視野の狭さ、思考の硬さを、思いっきり揺さぶっていただいた2年間でした。

また、当時の理事長の随行で地方制度調査会の議論を間近で聞かせていただき、自治制度の歴史に対する関心が生まれ、その中で本市の市民自治の歩みを自分なりに考えるようにもなりました。以来10年近く、いまだに消化しきれないながらも、当時のことは常に参照しており（『都市問題』も読んでいます）、自治体管理職としての力にもなっています。

ここならではの研究職あるいは行政職のコミュニティをはみ出す多彩なご縁には、本当にお世話になり、ありがとうございました。そして、東京都市研究所の益々のご発展をいつまでも祈念しております。